

## 「オンライン〇〇」について思うこと

宇賀荘交流センター館長 深田 三夫

コロナ禍第4波の下げ止まり傾向の中、オンライン会議、オンライン授業など「オンライン〇〇」が日常生活で使われることが多くなりました。このことは今に始まったことではなく、インターネットが急速に普及し始めた2000年前後から「遠隔〇〇」あるいは「インターネット〇〇」という名のもとごく普通に使われていました。私は大学教育の現場に勤めておりましたが、多くの大学、特に新制の大学は前身が専門学校で構成されており、いくつかの都市にキャンパスが分散していました。その結果、全学の会議となると一同に会することは難しく、遠隔会議にならざるを得なかったのです。また大学院に至っては複数の大学で構成されていることも多く、遠隔講義が普通の講義の形態でした。会議同様、学生への資料配布や事務連絡なども電子メールでのやりとりが普通でした。手書きに比べ大量の文書が瞬時にやりとりできるその利便性の高さから、日常生活に余裕が生まれ、自分の時間ができると誰しも思っていたと思います。

ところが電子メールや遠隔会議について、次の点で私たちは大変な勘違いをしていたのだと気づき始めたのです。その1) 本当に仕事量は減ったのか、その2) インターネットでお互いの気持ちは通じ合えるのか。1. については多くの人の予想とは逆にパソコンに向かう時間が増え、仕事量は膨大になっていきました。詳しくは述べませんがパソコンの奴隷のごとくなくなってしまったのです。2. について、メールをやりとりしながら意見交換していたときのことです。「私の考えとあなたの考えは違いますから受け入れません」、「いえ、あなたの考えが間違いとは言っていませんよ。少し変更してこうしたらいいのではないかと言っているのです」。こんなやりとりがメールで幾度となく続きましたが合意を得ません、結局、お互いに会って話すことにしました。文章にならないような会話が続いた後、「あっ、そういうことでしたかあ。それだったらわかりますよ。そのようにしましょう」あっけない幕切れで事はうまく治まり、時間をかけてのメールのやりとりは何だったのかと思いました。このようなことが幾度かありましたが、それ以来私はなにか物事を決める際には、文章のやりとりは止め、車で行ける範囲なら直接会って話し合うことにしたのです。

以上のことは私がまだインターネットとの付き合いに慣れないせいかもしれません。しかし、ひとの気持ちを動かすものは、文字情報、映像、音声だけではなく、その場で感じる相手の目の動きや表情、なにげないしぐさ、つぶやきなど、いわゆる「対面」による「もの」と「こころ」の総合的な情報交換ではないでしょうか。コロナ禍で大きな行事を中止せざるを得ないなか、少人数の集まりや催しは引き続き交流センターが企画し今まで同様に実施します。加えて各種団体やサークルのみなさまは定例活動を続けながら、他の団体とも協力して新しい企画を発案され、より多くの地域住民の方の参加を募って頂きますようお願いいたします。交流センターもできる限りのサポートをしたいと思っています。